§ 6. **結 び** Conclusion.

以上で大體の說明を終つた次第ですが，“光度計算用計算圖表”と尤もらしい名は付けても，要するに，光度計算に必要な數値間に於ける，簡單な乘除圖表に過ぎないのである．

然し，此の簡單な圖表でも，普通の長週期及び不規則の變星の數多い觀測を整理するに當のては，充分有力なる助手たる事を信じ，諸兄の御愛用を願ふ次第である．(16. 2. 25)

三 つ の 訃

河合章二郎氏 かつて東京天文臺の職員であつた同氏は，本年一月31日大阪で病沒された．享年56歲餘，氏は東京に生れ，商工中學と物理學校を卒業して，明治45年五月より天文臺に入り，諸種の觀測，殊に時刻と報時の研究に當り，毎年六月10日の“時の記念日”などには，街頭で活躍した．大正7年六月8日の鳥島の皆既日食には，京都大學の山本隊と行を共にしたが，此の時には曇天に禍ひされ，不首尾に終つた．大正14年三月辭職し，大阪方面で實業に從事し，又，大阪工學校でも教鞭を採つたことがある．昭和2年の水星の太陽面通過の機に，臺灣で山本博士と遭はれたことは“天界”82號33頁及び“自然科學”3卷133頁にある．

蘆野敬三郎氏逝く 天文年鑑1934年版“本邦天文家一覽表”を見る人は，明治21年東大卒業の元老中に蘆野氏の名を見出すだらう．又，天文讀書子ならば，G. E. Hale 氏の Stellar Evolution (1908) を譯して，大正8年に博文館から“宇宙の進化”を出版した蘆野氏を記憶してゐるであらう．氏は慶應3年に生れ，明治21年東大星學科を卒業して直ちに海軍教授となり，大正10年依願免官となるまで永く海軍々人の理學教育と，水路部の事業に沒頭し，邦國のため功績の多い人である．S. Newcomb の名著 Compendium of Spherical Astronomy を譯されたことがあるが，未だ出版されず，水路部で今尙ほ原稿のまゝ使用されてゐる由．氏は永く病臥中のところ，本年二月17日逝去された．

ドバーク博士逝く 二重星を研究すると William Doberk といふ名によく遭ふ．自分は1929年スマトラからの歸りに香港の對岸の九龍にある天文臺を訪ねたことがある．ドバーク氏が此所に居たことがあつたからである．このドバーク氏は1852年にコペンハーゲンで生れ，1874年にアイルランドの Cooper 大佐の天文臺で天體觀察を始めたが，其の後は各地に移つた．晚年にはロンドンの南部 Sutton に私立天文臺を建て，“6吋”屈折機で1927年まで二重星を觀測した．生涯，比較的小さい器械を使つたが，二重星の觀測は總計13000回に達し，結果はアイルランドのアカデミ Transaction やナハリヒテンに發表した．エイトケン博士に據れば，ドバーク氏ほど夥しい二重星の研究者は他に無い由である．氏は本年一月5日サトンの家で死去した．(山本)